

武藏野日曜集会

神殿
——ヨハネ伝第2章12～25節——

1994年3月20日

小池辰雄

キリスト自身が活ける教会堂 神の殿^{みや} 聖靈の活ける宮 地上にいても神の國の人 キリストの血によつて過ぎ越される 靈体をもつた神の國の宮になる

【ヨハネ2・12～25】

¹²この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数日留りたり。

¹³斯てユダヤ人の過越^{すぎこし}の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。¹⁴宮の内に牛・羊・鶴を売るもの、両替する者の坐するを見て、¹⁵縄を鞭に^{ひら}つくり、羊をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、¹⁶鶴をうる者に言い給う『これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を商売^{あきな}の家とすな』¹⁷弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶い出せり。¹⁸ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徵を示すか』¹⁹答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』²⁰ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起こすか』²¹これはイエス己^{からだ}が体の宮をさして言い給えるなり。²²然れば死人の中より甦えり給いしのち、弟子たち斯く言い給いしことを憶い出して聖書とイエスの言い給いし言とを信じたり。

²³過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その為し給える徵を見て御名^{みな}を信じたり。²⁴然れどイエス己を彼らに任せ給わざりき。それは凡ての人を知り、²⁵また人の衷にある事を知りたまえば、人に就きて証する者を要せざる故なり。

●キリスト自身が活ける教会堂

¹²この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数日留りたり。

「カペナウム」はガリラヤ湖の方で、キリストの伝道の根拠地みたいな所です。



¹³斯てユダヤ人の過越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。

¹⁴宮の内に牛・羊・鶴を売るもの、両替する者の坐するを見て、

宮の内に商売屋が来ている。

¹⁵繩を鞭につくり、羊をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、¹⁶鶴をうる者に言い給う『これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を商売の家とすな』

これは神を瀆す行為だから、とんでもないということで、キリストも怒ると、こういう行動に出る。キリストは決して単にただ優しいひとではない。普通の人でできないようなどを始める。弟子たちはこれを聞いて、

¹⁷弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶い出せり。

これは詩篇69篇にある。

「⁷我はなんじのために謗をおい恥はわが面をおおいたればなり。⁸われわが兄弟には旅人のごとく、わが母の子には外人のごとくなれり。⁹そはなんじの家をおもう熱心われをくらい汝をそしるもの謗われにおべり。」（詩篇69・7～9）

「神の家をおもう熱心」という。

¹⁸ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』

何か奇蹟を見せろと言う。

¹⁹答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』

こんなことはキリストでなければ言えない。「三日でもつて建てるぞ」と、ユダヤ人はその意味はわからない。

²⁰ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは二日のうちに之を起こすか』²¹これはイエス己が体の宮をさして言い給えるなり。

この21節が大変なことです。神殿だとか、お宮だとか、お寺だとか、建物はどうでもいいんだということ。ところが、東西どちらでもきらびやかな大きなものを建てる。ヨーロッパへ行つても大きな教会堂があるし、こちらにもお宮だとかお寺だとか、みな大袈裟なのが大いに有難がる。内村鑑三が「無教会主義」というのを始めたのは、

「そんなことではない。教会堂は要らん。どこへ行つてやつたつて、山へ行つてやろうが、海辺でやろうが、誰かの家を借りてやろうが、そんなことはどうでもいいんだ」

というのが内村先生の気持だつたわけだ。それで「無教会」なんてな言い方をした。教会が無いのではない。「教会堂は要らない」ということです。「無教会主義」というのはヘタす



ると誤解される。教会がなかつたらしようがないんだ。教会というのはキリストの体だから、信者の集まりが教会なんだから。「教会」という訳が本当はおかしい。信徒の集まりということです。

²¹これはイエス^己が体の宮をさして言い給えるなり。

この21節が大事な節です。キリスト自身が活ける教会堂なんだ。

●神の殿

歴代志略上29章に、

「¹ダビデ王また全会衆に言ひけるは我子ソロモンは神のただ独り選びたまえ
る者なるが少くして弱くこの工事は大なり。これは人のために非ず、エホバ
神のためにするものなればなり。……」

「殿^{みや}は神のためにする」という。けれども、別なところで、

「そんなものは要らない。天地が自分の宮である」

ということを、エホバ神の示しで預言者に言つてゐるところがあります。

¹¹エホバよ権勢と能力と榮光と光輝と威光とは汝に属す。凡て天にある者地
にある者はみな汝に属す。エホバよ国もまた汝に属す。汝は万有の首と崇め
られたもう。¹²富と貴^{とく}とは共に汝より出づ、汝は万有を主宰たもう。汝の
手には権勢と能力あり。汝の手は能く一切をして大ならしめ又強くならしむ
るなり。¹³然れば我らの神よ、我ら今なんじに感謝し汝の尊き名を讃美す。
¹⁴但し我らかくのごとく自ら進んで献ぐることを得たるも我は何ならんや、
また我民は何ならんや、万の物は汝より出づ。我らはただ汝の手より受けて
汝に獻げたるなり。」(歴代志略上29・1・11～14)

この辺は非常に福音的な言葉ですね。

「何でも与えられているので、自分がつくつたものなんかありはしないんだ、みな

全部神さまのものだ」

と。旧約では、「神の殿^{みや}」といふこと、

「宮は神のためだ」

ということが言われている。

列王記略上の5章と8章に神殿のことが書いてある。

「汝の知ることく我父ダビデはその周囲にありし戦争に因りてその神エホバの
名のために家を建てることが能わざしてエホバが彼等をその足の^{うら}跖の下に置き
たもうを待てり」。(列王記略上5・3)

¹⁶即ち我は吾民イスラエルをエジプトより導き出せし日より我名を置くべき
家を建てしめんためにイスラエルの諸^{もろもろ}の支派^{わかれ}の中より何れの城邑^{まち}をも選み



しことなし。ただダビデを選みてわが民イスラエルの上に立しめたりと言ひたまえり。¹⁷ それイスラエルの神エホバの名のために家を建つることはわが父ダビデの心にありき。……

²⁷ 神果して地の上に住みたもうや、視よ天も諸^{もろゆゑ}の天の天も爾^{なんじ}を容るに足らず。まして我が建てたるこの家おや。²⁸ 然どもわが神エホバよ僕の祈祷と懇願を顧みてその号呼と僕が今日爾のまえに祈る祈祷を聴きたまえ。²⁹ 謙くは爾の目を夜昼^{よばわり}この家に即ち爾が我名はそこに在るべしといいたまえる処に向いて開きたまえ。謙くは僕のこの処に向かいて祈らん祈祷を聴きたまえ。³⁰ 謙くは僕と爾の民イスラエルがこの処に向かいて祈る時に爾その懇願を聴きたまえ。爾は爾の居處^{すみか}なる天において聞き聽きて赦したまえ。」（列王記略上8・16～17、27～30）

「エホバの名のための家」と、どこまでも神殿は神さま中心であつて人間のためではない、というような意味で言つてゐるわけです。

●聖靈の活ける宮

新約では、コリント前書6・19に、

「¹⁴ 神は既に主を甦えらせ給えり、又その能力^{ちから}をもて我等をも甦えらせ給わん。¹⁵ 汝らの身はキリストの肢体^{したい}なるを知らぬか、

我々の体はキリストとつながつてゐる。「肢体」というのは枝葉^{しや}ということ。

然らばキリストの肢体をとりて遊女の肢体となすべきか、決して然すべからず。¹⁶ 遊女につく者は彼と一つ体となることを知らぬか『二人のもの一体となるべし』と言い給えり。¹⁷ 主につく者は之と一つ靈となるなり。

この17節が大事ですね、「キリストにつく者は之と一つ靈となるなり」と。¹⁸ 淫行を避けよ、人のおかす罪はみな身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。¹⁹ 汝らの身はその内にある、神より受けたる聖靈の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。

19節が大事な節です。私たちはキリストを受けとつたかぎり「聖靈の宮」である。我々自身が「聖靈の活ける宮」であるということです。我々自身は一人一人が神殿だという。

²⁰ 汝らは価をもて買われたる者なり、然らばその身をもて神の榮光を顯せ。」（コリント前6・14～20）

「価をもて買われた」とは十字架の贖罪のことです。これはとんでもない価、無限の価です。十字架でもつて買われた。然らばその身をもて神の榮光、キリストの榮光を顯せと。我々は聖靈の活ける宮だという。

默示録21章は決定的な言葉です。



「²²われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。

天の都には神殿がない。神さまとキリストが活ける宮だ。だから、いわゆる神殿ではないと。
 都は日月の照すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊はその燈火なり。

これは非常に靈的な現実です。こういう靈的な現実は冥想するよりか仕方がない。冥想してそういう光の現実の中に入る。ダンテの『神曲』の天国篇もこういう言葉にはかなわない。

²⁴諸国の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光榮を此處に携えたり。都の門は終日閉じず（此處に夜あることなし）²⁵人々は諸国の民の光榮と尊貴とを此處にたずさえ来らん。²⁶凡て穢れたる者、また憎むべき事と虚偽とを行う者は、此處に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此處に入るなり。」（黙示録21・22～27）

キリスト者というのは、いい加減なことではない。

要するに、パウロの手紙を見ても分かりますけれども、

「我々自身が活ける宮であつて、お寺がどうだ神殿がどうだという、いわゆる建物の問題ではない」

と。内村先生の無教会主義はその見当でいつたただけれども、今度は本当に

「我々自身が宮である」

といふところまでははつきり言わない。それは聖靈の受けとり方がまだ弱かつたからです。

●地上にいても神の国の人

我々自身が神殿である。神の家、神の宮。だから、我々は神族、神の族なんだ。キリストによつて神の子とされているわけだから、神族だ。要するに、地上にいても神の国の人だ。

「われらの国籍は天にあり」

とパウロが言つた。そういう意味においては、もう天も地も一つになつてしまふ。コロサイ書1・17に、

「¹⁷彼は万の物より先にあり、万の物は彼によりて保つことを得るなり。¹⁸而して彼はその体なる教会の首なり、彼は始にして死人の中より最先に生まれ給いし者なり。これ凡ての事に就きて長とならん為なり。」（コロサイ1・17）

（18）

「教会の首」とある。パウロの手紙の中には体とか宮とか、そういう言い方をよくしている。建物に譬えているところもある。その基はキリストで、預言者と使徒がその次で、それから信徒であるなんて言つてゐる。エペソ書2章に、

「²⁰汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。²¹おのれの建造物、かれに在りて建て合わせられ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。²²汝等もキリストに在りて共に



建てられ、御靈によりて神の御住となるなり。」（エペソ2・20～22）
建物に例えている。「御靈によりて神の御住となる」、「聖靈によりて神の住まいとなる」という。

「⁶即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣となり、共に
一体となり、共に約束に与かる者となる事なり。」（エペソ3・6）

と、いろいろな言い方をするわけだ。

●キリストの血によつて過ぎ越される

¹³斯^{かく}てユダヤ人の過越^{すきこし}の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。
とある。「過越の祭」は出エジプト記12章に出ている。

「¹エホバ、エジプトの国にてモーセとアロンに告げていいたまいけるは、
²此月^{この}を汝らの月の首となせ汝ら是を年の正月となすべし。……

「此月」とはアビブの月またはニサンの月といつて3～4月の頃です。向こうでは春が正月だ。

⁷その血をとりて其之を食う家の両旁^{ふたたび}の柱と鴨居に塗るべし。……⁸而して此夜そ
の肉を火に炙^{やき}て食い又醉^{たね}いれぬパンに苦菜^{にがな}をそえて食うべし。……¹¹なんじ
らかく此を食うべし即ち腰をひきからげ足に靴を穿き手に杖をとりて急ぎて
之を食うべし、これエホバの逾越節^{すきこし}なり。¹²是夜われエジプトの国を巡りて
人と畜^{けもの}とを論^{いわ}ずエジプトの国の中の長子たる者を尽く擊殺^{うち}し又エジプトの
諸^{もろもろ}の神に罰をこうむらせん。私はエホバなり。¹³その血なんじらが居ると
ころの家にありて汝等のために記号^{しるし}とならん。我血を見る時なんじらを逾越^{すきこ}
すべし又わがエジプトの国を撃つ時災なんじらに降りて滅ぼすことなかるべき
し。¹⁴汝ら是日を記念^{おぼ}えてエホバの節期^{いわいび}となし世々これを祝うべし、汝等之
を常例となして祝うべし。¹⁵七日の間醉^{たね}いれぬパンを食うべし。その首^{はじめ}の日
にパン酵^{ちから}を汝等の家より除け。凡て首^{はじめ}の日より七日までに酵入たるパンを食
う人はイスラエルより絶^{たた}るべきなり。」（出エ12・1：15）

「³モーセ民にいけるは汝等エジプトを出で奴隸たる家を出るこの日を記號^{おぼ}
よ、エホバ能^{ちから}ある手をもて汝等を此より導きいだしたまえばなり、酵^{たね}いた
るパンを食うべからず。……⁶七日の間なんじ酵^{たね}いれぬパンを食い第七日に
エホバの節筵^{いわい}をなすべし。」（出エ13・3：6）

「酵^{たね}いりのパンを食べてはいかん」と書いてある。それは出エジプトするときには非常に急
いで出かけなければならなかったから。酵を入れると醸酵するでしょ。これは除酵なんです。
それで除酵節という設定もあるわけです。「過越」とは、

「その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号^{しるし}とならん。我血
を見る時なんじらを逾越^{すきこ}すべし」

ということからきている妙な言葉です。血なまぐさい内容ですけれども。ということは、



これを今度は新約の方でいうと、福音的にいうと、キリストの血によつて過ぎ越されるわけです。キリストの血の贖いで、我々は罪から、罪を問われないで過ぎ越される。即ち、救われることになる。そこからだんだんそういうことになるんだね。妙なことです。過越とはそういうところから来ている。出エジプト記12章はその意味で大事なところです。ヘブライ語では「ペサッハ」という。バス・オーバー、「過ぎ越す」ということ。

「⁶汝らの誇りは善からず、少しのパン種の、粉の団塊をみな膨れしむるを知らぬか。⁷なんじら新しき団塊とならんために旧きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。それわれらの過越の羔羊、即ちキリスト既に屠られ給えり、⁸されば我らは旧きパン種を用いず、また惡と邪曲とのパン種を用いず、真実と眞との種なしパンを用いて祭を行うべし。」（コリント前5：6～8）

「汝らはパン種なき者なればなり」とは、「過ぎ越された者」ということの別な表現なんです。我々はキリストの血によつて過ぎ越されて、罪を問われないで、救われる。過ぎ越されないと、エジプト人のように殺されてしまう。そういう古い事柄から、福音的な解釈にパウロが使つてはいるわけです。

●靈体をもつた神の國の宮になる

「我々は聖霊の宮である」

というコリント前書6章19節のところと、コリント前書3章16節の

「神の宮である」

というところ。それから、

「宮はないけれども、神とキリストが活ける宮である」

という默示録21章22節。要するに、我々が活ける神殿、活ける宮であるということ。それがキリスト者の自覚でなければいかん。そして、その活ける宮の中にあるものはキリストの靈、聖靈である。聖靈がなければ、活ける宮ではありえない。聖靈を受ける土台は十字架です。十字架の血によつて過ぎ越されたから。そういう連関になるわけです。だから、十字架と聖靈は離すわけにいかない。

それが今日の、過越と宮のところが、ヨハネ伝2章12節から22節までの中心です。そして、イエス・キリストが誰よりも最もはつきりした神の宮であるわけです。だから、十字架に架かつても滅びない。復活したキリストは靈的な宮です。我々がまた、肉体は滅びても、今度は新しく靈体がある。向こう側にいくと今度は靈体をもつたところの宮、神の國の宮になるわけです。神の國の宮は靈体をもつてはいる。ダンテの『神曲』の天国篇をみても、そこらははつきり言わせてないね。あれは幻の世界だから仕方がない。それが今日のお話の中心であります。

